

## 第1回資料

### ワーグナー『ローエングリン』・第二幕第五場のアンサンブル場面について

開始部分のイ短調 → 変ロ長調：

アンサンブルの終結部のヘ短調 → ハ長調とともに、この特異なアンサンブル場면을縁取ることになる。

変ロ長調の二重の機能

- 1) 先行場面からの切断
- 2) あらたな場面の主調として確立され、この場を支配するかわりに、単にハ短調の属調平行調（変ロ長調はハ短調の属調であるト短調の平行調）として、この場の主調（の一つ）であるハ短調のなかに解消される。

ハ長調の属調（ト長調）の平行調であるホ短調、あるいはハ長調の平行調であるイ短調

↓

ハ短調

ハ短調の平行調である変ホ長調、あるいはハ短調の下属調であるヘ短調

↓

ハ長調

たとえば、ホ短調とハ短調の対比は、ハ長調という媒介項を想定しないかぎり、理解できない。同様に、ヘ短調とハ長調の対比は、ハ短調という媒介項を想定しないかぎり、理解できないだろう。

カール・ダールハウスの指摘：（調の）絶えざる転換と（転調による）展開を欠いた持続のパラドキシカルな同時並存。このような状態をもたらしているのが、ハ長調＝ハ短調という二重調である。

課題：上記のような調的和声のシステムにおけるパラドキシカルな状況について、ジャック・ラカンの論理的時間の概念との関連から、分析を試みなさい。